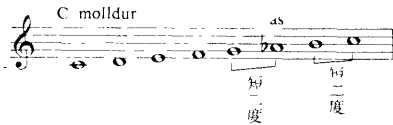


作曲のヒント

(五)

変化和音と転調



外山友子

今まででいただきたい、長調(dur)、短調(moll)のTDSがわかりました。そのいろいろな形、つまり基本位置、第一転位、第二転位がある音は重複され、ある音は省略されて、メロディに美しく和声がつけられていきますが、このハーモニーをより豊かにするには、これら主三和音(TDS)だけでなく、他の各度上の三和音もとり入れ、さらに、#やbがついて変化和音となり、和音の種類が増したり、また、はじめの調が途中で他の調に移る、すなわち転調ということも考えられます。

この変化和音や転調のお話をする前に、もう一度音階について思い出して下さい。

短音階の場合は、和声の進め方をよくするために和声的短音階を用いております。長音階にも、この和声的長音階があるのです。すなわち、第六度の音が、半音下げられて、C dur ではaがasになります。これを和声的長音階(molldur)といっています。

この音階から molldur の和音を作ってみますと、二度上、四度上、六度上に作れます。もちろんこれは基本位置だけでなく、それぞれ第一転位、第二転位も用いられます。かたい感じの dur の中で、この音が入りますと、やわらかい感じになってきます。つまり、やわらかい dur という意味です。だいたい日本では長と短に分けていますが、dur はかたい、moll はやわらかいという意味であることを知れば、この molldur の意味も、その和音の感じももうなげ



(第一転位)



D dur



ると思います。
古くからある歌ですが、キュービ
ーさん(弘田竜太郎作曲)をごらん
ください。この曲は、二長調(D
dur)ですが、前奏④の三小節目の
はじめの音は何でしょうか。一番下
の音からいいますと、b d g d で
すが、これは、D dur のSである
ことがわかります。この第三音が低
音ですから、第一転位、そして第五
音が重複しています。
次に最後から二小節目「たってる」
の「たっ」の和音の基本位置を考
えてみましょう。♭音が四つ重な
った四和音になりましたが、とに
かく二度上の和音で、やはり第三
音がgが低音になっている第一転
位です。そして、durの六度の音
ラにもがついて mollur である
ことがわかりと思います。
このように、この曲の中に出て



F dur

(第一転位)



きたりのついた二つの和音は変化和音でもなく転調しているのでも
なく、よく用いられる mollur なのです。
ては次に、変化和音がどんなところに、用いられているかを見て
みましょう。
「お星さま」(団伊玖磨作曲)を例にとりました。「おほしさま
ピカリ」のカの和音は、下から、
h g d g ですが、この基本位置は
Fdur の二度上の三和音、第三音
ファが半音上がってbがhにな
り、長三和音になりました。
「ちいさなこえて」の「え」の和
音は、一度上に作られた三和音で
すが、その一度のfの音に#がつ
いて fis になった変化和音です。
さらに「さ」の和音は、この一度
上の三和音に、eにdのついたes
が加わって、fis a ces の四和音で
す。fis a c までは短三和音になり
ますが、この fis — es の音程は減七
度、すなわち短三和音と減七度を
持った一度上の変化和音です。そ

⑧

C durでは#
G durではD—D₇
(属七の和音)

⑨ F dur

⑩

⑪

C dur — D
G dur D—T

⑫ C dur

して、おしまいのおはなし
 てる」の「し」の和音は二度上の
 四和音ですが⑩、第三音ファが半
 音上がってbがhになっていま
 す。変化和音はこんなふうには、曲
 の中にいろいろの形で現われてき
 ます。今出てきたのだけを、一応
 まとめてC durに書きなおしてみ
 ましょう。⑬⑭

さて、このC durの二度上の変
 化和音①と②ですが、これはG
 durのD (属和音)とD₇ (属七の
 和音)にも考えられます。⑦
 ですから次にG durのT (主
 和音)がくれば⑯、C dur から
 G durへの転調の形になります。
 このdis aの和音がC durとG
 durの共通和音となって、出発調
 (C dur)から、目的調(G dur)へ
 転調の作用をしているのです。
 前に調を確立するものが終止形

⑮

C dur G dur D T S D T S T D T

す。この他C dur—a moll、C dur—F durなど、簡単な転調を作
 ってみることが出来ると思います。

子どもの歌に転調の理論など、あまり必要でないかもしれませんが、歌をうたう時、伴奏をひく時、変化和音や転調があらわれてきても、あわてずに、これは何の音の変化和音か、または、何調に転調していくのかということがわかるだけでもよいと思います。

(SDT)であると述べました
 が、転調の目的調の確立に、や
 はりこのSDTが必要になって
 くるわけです。つまり転調に必
 要なことは、先ず、出発調が確
 立して、次に共通和音や変化和
 音で転調の作用がおこなわれ、
 そして目的調の確立という三部
 分の構成です。⑮ これは1、2
 3で出発調(C dur)が一応確立
 して、3が共通和音、4が
 変化和音でG durのDとなり、
 転調作用がおこなわれ、そして
 5以下で、G durのSDTがそ
 ろって、目的調が確立していま